中等國語讀本 巻三

375.9
Oc8
資料室

30292
教科書文庫
3
810
41-1902
200030
1969

資料室
375.9
Oc 8
廣島大學圖書之印
廣島
教育學部圖書館之印
廣島縣賀茂郡東志村
賀川藏書
廣島大學教
33962

中等國語讀本卷三目次

一、德育……一
二、學藝に志す者の訓……四
三、畫を視て心を改む……七
四、畠山重忠……一二
五、八重山吹（今樣）……一七
六、婦人のまこと……一八
七、籠城日記一節……二〇
八、獨逸留學中の所感……三二

九、ナポレオンの言行の一二……三七
一〇、長篠……四三
一一、殊勝なる武者振……四六
一二、唐崎の松……五〇
一三、端艇につきて友人に贈る書……五三
一四、長良川の鵜飼……五八
一五、旅行の趣味……六三
一六、霧島山に登る記その一……六五
一七、霧島山に登る記その二……六九
一八、夜旅（今樣）……七四

一九、半家村……七五
二〇、種々の生業……八〇
二一、松島……八二
二二、天橋立……八五
二三、人の三景の優劣論を駁する書……八八
二四、古今傳授松の碑文……九二
二五、軍港……九六
二六、トラファルガルの海戰その一……一〇〇
二七、トラファルガルの海戰その二……一〇七
二八、赤道直下の一日……一一二

二九、カナダ鐵道……一一六

廣島大學圖書之印

中等國語讀本卷三

一、德育

學問には、智育、德育、體育の三種ありて、その中、德育を、最も、大切なりとす。われよそ、人たる者は、誰も、皆、自然に、良善の性を受けて、うまれいでたる者なれども、物欲のために、その本心をくらまされて、邪道に陷り、禽獸にも劣る所の惡行をなして、耻ぢざるもの少からず。かくの如き不德の人民、增加する時は、小にしては、

一國の安寧を失ひ、大にしては、他國の侮辱を受け、甚しきは、その國、滅亡の禍に罹る者なり。故に、學問の第一は、能く、善惡正邪の別を明にし、良心の力を以て、物欲の私を制し、天稟の美質を全うするにあり。

元來、我が日本國民は、その道德力の厚きこと、他國に勝り、善行美跡の、歷史に存するもの、甚だ多し。然るに、近年、國民知識の進むと共に人心、浮薄に流れ、その品行の修らざる者、その心術の正しからざる者、日に、ますます、多きを加ふる如き觀あり。

今上陛下、深く、これを憂ひ給ひ、二十三年十月三十日、大詔を煥發せられ、日本國民の道德の基礎を定め給へり。これより以前は、德育の基礎定らず、教育をなすものは、十人十種の說を唱へたりしが、この聖詔の下るにれよび、暗夜に、日月を得たるが如く、十方光明にして、盲者といへども、道德の道路に、迷ふ者なきに至れり。

今日より、德育の教育をなす者は、この聖詔を遵奉して、怠らざるときは、國民の道德は、必ず、完全の地位に達することを得べし。然れども、詔勅は、文意、簡潔にして、意義、深奥なり。全國の民庶をして、悉く、これを奉

行せしめむとするには、教育の任に當る者、よく、これを解釋敷衍し、國民をして、智愚、共に、その惠を被らしめざるべからざるなり。（西村茂樹著道德論抄錄）

二、學藝に志す者の訓

今の人、或は、學に志し、或は、藝に志すもの、一旦は、憤を起し、晝夜をわかたず、勉め勵むといへども、すでに、半月を經、一月を過ぐれば、怠る心、はやく生じ、我が務の至らざることはいはで、これを、性質の愚に歸す。馬はやしとて、朝、ゝばらく走りて、やまむには、いかでか、

牛の終日ありかむに及ぶべき。谷間の石の磨け、井轂のまるくなるも、豈に、一朝一夕の力ならむや。今日やまず、明日やまず、今年やまず、明年やまず、かくして、後、そのゝるしあり。人、一生の力を、その道に用ゐてすら、猶、その奥義に至らむは、やすからじ。まして、我が半月一月、乃至、半年一年の務を以て、他人一生の功に比せむとす。思はざるも、甚しといふべきなり。

李白、書を匡山に讀む。やうやく、倦みて、外に出でしに、道に、老人の、石にあてゝ、斧をするにあひぬ。これを問へば、「針になさむとて、するなり」と、いふ。李白、大に感

じて、再び、書を讀むことをつとめて、終に、その名をなせり。小野道風は、本朝名譽の能書なり。若き時、手を學べども、進まず。ある日、後園に徘徊しけるに、たまたま、蛙の、泉水のほとりの、枝垂れたる柳に、飛びあがらむとして、とゞかざりけるが、なほも、いくたびか、飛びつきて、終に、その枝にうつれり。道風、これを見て、はじめて、藝のつとむるにあることを悟り、これより、學びて、すこしも、やまざりしかば、その名、遠く、今の世までも殘れり。（三浦安貞著梅園叢書）

三、　畫を視て心を改む

今は昔、二十年餘にもなりけむ、れのれ、京にありし頃、事ありて、東の方へ下向せり。時は、六月の二十日ばかり、甚しき暑さを堪へて、近江の國、水口驛のこなた、田川といふ里まで來しに、道の傍に、枝さし延べたる大なる松ありて、その下蔭の、いかにもすゞしげなれば、そこに立ち寄りぬ。さる程に、白衣を着たる行者らしき者七人ばかり、寄り來つるが、又、六十ばかりなる翁の、供一人具したるが、兩掛といふもの荷はせて、これも、此處により來ぬ。とかくする程に、その翁、荷の中

より、袴とり出でて、そを身につけ、東方にうち向ひて、伏したるが、涙とゞめあへぬさまなり。

彼の行者らしき者の、「翁は、何事のたはしましたるにか」と、いふ。翁、答へていへらく、「これにつけて、忘られ難き我が身の昔語あり。行者達、皆、若うたはすれば、聊か、戒の助にも聞き給へ。こは、世にはづかしき事ながら、語りきこえむ」とて、語り出づるを、たのれも、何事にかと、さし寄りて聞けば、翁、下の如く、いひつゞけぬ。

我は、十二の時より、浪花なる心齋橋の、相模屋某の家につかはれたる者なり。さるに、其の家に、嫡子なる若子あり。この人、若きすさびに、金あまた失ひしかば、遂に、親の家を逐はるゝ事となりしが、其の時、そが母刀自の、我を、竊に呼びて、「汝が志は、常に、賴もしう思ひわたるを、こたび、若子に添ひて、何處までも、後見してよ。これは、事あらむ時に」とて、若干の金を預けられぬ。かくて、若子に隨ひて、下總の國松戸の里までさすらひぬ。

さるに、預れる金は、その子の、皆、遣ひ失ひたるに、行くべき方もさだかならず。行末思ひ續くるにつけて、迷の心起りつゝ、いとも、耻かしき事ながら、かく、

かひなくてあらむよりは、この若子を捨てゝ、いかなる身にもと、思ひなりぬるなり。されど、このまゝにては、明日より末のたづきもなし、それよ、若子の腰刀こそいとよき物なれ、いでや、盗み取りて賣らむと思ふまゝに、その寢間に忍び入れば、襖の畫の、彩りたるが、燈火の影にほのぼの見ゆ。見るともなくて見れば、松の梢より、村雨のかゝりたるが、その下蔭に、いと貴げなる御方の、人の肩に助けられて、立たせ給へり。これ即ち、この向の林の中に、御墓のまさしう殘り給へる藤房卿の、建武の帝を負ひ奉りて、笠置の里を遁れ出でさせ給ふところなり。これを見て、われ、始めて悟りぬるは、かゝる貴き御方にも、かく、われはしましたるを、賤しき我等の身に、かばかりの事、何かはあらむと、速に、心改めぬ。

それより、若子に添ひ、上總の國某の里にて、三年過しゝが、若子は、遂に、勘氣ゆるされて、家に歸り、われは、店一つ與へられて、相模屋の名をさへゆるされぬ。我が名は、五郎兵衛といふ者にて、今は、召使のものも多く、心安う世を渡りぬるを、其のもとを思へば、この卿の事によりてと覺ゆるまゝに、年毎に、江

戸に行くとて、此處を過ぐる時は、いつも、この卿の貴さをも、身の昔をも思ひ出でて、かくはするなり。この話の、あまりにあはれなれば、たのれも、思はず、旅の衣の袖を濡らせり。（堀秀成著說教講錄）

四、畠山重忠

畠山重忠は、武藏の人にて、性質、敦厚なり。源頼朝につかへて忠勇ならびなかりしが、文治中、伊勢の神人家綱といふ者、重忠の目代が、神戸を鈔暴せりと訴ふ。頼朝、怒りて、重忠の采邑を削り、千葉胤正の第に拘ふ。重忠、七日まで食を絶ち、口を杜ぢて、ものいはず。胤正、そのよしを、頼朝に告げけるに、頼朝、大に驚き、そを釋しぬ。重忠、等列にいひけるは、「たよそ、邑土を受くる者は、宜しく、目代を擇ぶべし。吾、つねに、清潔を以て、身を律するに、不覺にも、不良の人を用ゐしより、いま、この辱をとれり」と。頼朝、これを聞き、命じて、その本領を復し、たゞ、その伊勢沼田の御厨を奪へり。

かくて、重忠、武藏にかへりぬるに、梶原景時、日ごろ、重忠の強直を疾みければ、頼朝に向ひ、「重忠、この程の事を怨み、邑に據りて、叛かむとす」と、讒す。頼朝、結城朝

光、下河邊行平を召して、「この事、いかにかすべき」と、問はれしに、朝光、申しけるは、「嚮に、重忠、目代の姦譎なりしを以て、暫く、譴怒を蒙りしが、この時に當り、唯、みづから、罪を引き、いさゝかも、怨むる色なかりき。その人となり、忠直にして、信を重じ、義を慕ふ。決して、異圖を懷くべき者にあらず。宜しく、これを召して、まのあたり、その情狀を察せらるべし」と、いふ。

こゝに、賴朝、行平が、重忠と善友なるを以て、それして、これを召さしむ。行平ゆきて、そのむねを告げしに、重忠、大に憤り、「我、何の缺望ありてか、自ら、舊勳を棄て

て、忽ち、叛人とならむ。赤心を以て、公に奉ずるは、幕下の知らるゝところなり。然るに、讒口のために陷れられて、こゝにいたれり。子の、今、命を銜みて來れるは、我を召して、誅せむとするなるべし」とて、刀を拔きて、將に、自殺せむとす。行平、遽に、これを止め、「子、常に譎らずといひながら、なにとて、かくは、人を疑ふらむ。信を以て、人に接することは、我、いかで、子に讓らむ。子も、我も、將軍の裔ならずや。事あらば、もとより、相對戰して、以て、雌雄を決せむのみ、いかで、詐謀を以て、子を陷れむ」と、いひけるに、重忠、心とけ、やがて、行平と共に、鎌倉に

至り、景時によりて、陳謝するところあり。

景時、「子、實に、叛謀の意なくば、宜しく、誓書を上るべし」と、いふ。重忠、「若し、人、我を以て、勇を恃み、財を掠むとせば、我、深く、これに愧ぢむ。今枉げられて、叛名を得たるは、たまたま、その勇を見すに足るのみ。然りといへども、我、源氏の興るにあひて、身を、幕府に委ね、未だ、嘗て、貳心を懷かず。然るに、忽ち、讒謗に罹れるは、誠に、不幸の極といふべし。我に、心と言と二つなし。いかで、誓書を用ゐむ。かつ、誓は、姦詐を防ぐためなり。わが赤心のほどは、幕下の知らるゝ所なり。子、たゞ、この由を白し給へ」と、いふ。景時、入りて、かくと申しけるに、頼朝、默然たり。召し見るにおよびて、たゞ、寒暄を叙し、一も、糾問におよばずして、事、遂に、釋くるを得たりとぞ。これ、眞に、重忠が至誠の致す所にて、いはずして、よく、己が志を達せしものなり。（元田永孚著幼學綱要）

五、八重山吹（千家尊福詠）

八重山吹の、ひと重だに、
人のゆるさぬ、枝をるな。
花ものいはぬ、世の中も、

神はさやかに、　見そなはす。

六、婦人のまこと

西暦千百四十年、獨逸國王コンラード二世の、ワインスベルグ城を圍みし時、城の主なりけるバイエルン王ウエルフは、よく、防ぎ戰ひしかど、遂に、力、屈して、降を、軍門に乞ふに至りぬ。その時、コンラード王は、使を、城中に遣りて、「城内にある婦人は、悉く、これを赦すべく、かつ、たのれの肩に擔ひ得らるゝ程の寶は、なににても、自由に、これを持ち去るべし」と、告げしめ給ひ

ぬ。こゝに、城中の婦人は、皆、一樣に思ひぬ。志ろがねの寶、こがねの寶も、なにゝかせむ、いとほしきは、後に殘り給ふべき、我が夫の運命なりと。かくて、婦人等は、互に、うちかたらひたる末、あらゆる寶をうち棄てゝ、各、たゞ一人の夫をば、肩に志つゝ、志づ志づと、城門を出でぬ。コンラード王の甥なりけるフリードリッヒ侯は、これを見て、「寶をこそ擔へとゆるしつれ、いかで、その夫を擔ひ去ることを許さむ」と、いきまき給ふを、コンラード王は、そをれしとゞめ、さもこゝちよげに、うち笑ひ給ひ、「綸言、汗の如し。一たび、出づれば、また、かへら

ず。よくも、はからひつる女子達かな」とて、更に、とがめも志給はざりけり。これより、この城をば、人呼びて、「婦人のまこと」と、いへり。

七、籠城日記一節

六月四日に至り、その拂曉、團匪、黄村附近の鐵路を破壞し、北京、天津間の交通を、また、絶てりとの飛報あり。北京、保定間の交通は、鐵路も、電信も、前日以來、破損の儘にて、未だ、開始するに至らざれば、同地方の情況は、全く、知ることを得ざれど、同地方在留外國人は、多くは、團匪に害せられたりとの說もあれば、大清河に菰包の外國人の屍、二つ流れ居りとの報、米國教會に達したりとの說もありて、人心、また、洶々たり。又蜚語あり。「四日、もしくは、五日の夜を以て、團匪、愈、事を擧ぐべし」と、いふこゝに、人々、皆、戒心するところありしが、二日とも、何事もなくて、過ぎぬ。外國公使は、事體、益、不穩になりゆくを見て、守備兵增加の議を決せしが、我が國も、前回入京せし兵數、他國に比して、著しく、少かりしゆゑ、旁以て、增員のことゝなれり。

これより先き、我が海軍省は、笠置艦を、太沽口に派

遣せり。その水兵五十名は、各國水兵と共に、修繕を了へたる鐵路により、この六日に入京すべき豫定なりしが、團匪に、その一部分を破壞せられたるよしにて、この日は入京せず。聞くところによれば、鐵路に沿へる電信線も、切斷せられたるよし。さては、北京、天津間の交通は、通州を通過する一條の電信線を存するのみとなりぬ。この日、午後、外國公使會議あり。萬一の場合に、公使館に據りて、團匪を防ぐことゝならば、全體の指揮を、英國公使マクドナルド氏に託することを議決せりといふ。

翌七日、各國公使館守備隊武官の會議あり。守備の計畫を定め、即日より、實行せり。この時、わが國公使館附武官柴砲兵中佐は、原海軍大尉と共に列席し、意見を陳べられしが、守備の計畫は、大體、柴中佐の意見によりて定りぬ。昨日、上諭一道ありしよしなるが、今日、見ることを得たり。その主意は、「教民、義和團、共に、國家の赤子なれば、朝廷は、一視同仁、決して、厚薄なし。然れども、奸民、匪徒、義和團の裡に溷じ、國家が造營せる鐵路を壞り、電線を斷ち、武辨を殺傷するにいたりては、その跡、亂民と異るところなし。朝廷、已に、趙舒翹を派

して、彼等を說諭し、解散を命じたれど、猶、奸民、匪徒、朝廷の厚意を體せずして、依然、集合滋事のことあらば、寬貸するところなく、嚴重に、處分すべし」とのことなり。已に、亂民と異らずといひながら、なほ、說諭解散を以て、事を濟さむとするは、緩漫の極といふべし。

八日、在留外國人會議あり。聯合して、義勇隊を組織し、防禦總指揮官たる英國公使の指揮により、行動することに決したるが、我が國は、水兵の數、少ければ、その動作を補助する必要ありとて、日本人だけにて、別に、義勇隊を組織し、他國人と共同せぬことゝなした

り。依りて、十日に、義勇隊を組成し、在留陸軍步兵大尉安藤辰五郎氏を隊長に推し、一切、その約束に遵ふことゝなしぬ。その隊員は、

公使館一等書記官法學士	石井菊次郎
公使館二等書記官	楢原陳政
外務省翻譯官	鄭永邦
同	德丸作藏
外交官補	兒島正一郎
公使館書記生	杉山彬
外務省留學生	野口多內
文部省留學生、東京帝國大學文科大學助	

教授、文學士　服部宇之吉
文部省留學生、文學士　狩野直喜
正金銀行員、豫備陸軍三等軍吏、法學士　小貫慶治
北京電燈會社技師、工學士　小川量平
大阪朝日新聞社特派員、法學士　村井啓太郎
時事新報社特派員　岡正一
東京日々新聞社特派員　古城貞吉
西公使執事　大迫半熊
京師大學堂東語教習　西郡宗三郎
留學生　大和久義郎

同　竹内菊五郎
西本願寺留學生　川上貞信
石井書記官執事　川上季藏
北京同文館東語教習　杉幾太郎
寫眞師　渡邊知吉
同　山本讃七郎
同　松本幸八
同　平野守信
同　望月東涯
筑紫辨館員　中村秀次郎
公使館ボーイ取締　林良茂

北京電燈會社電工　木村德次郎
同　小寺梅吉
同　大西平吉
理髮師　若杉彌平太
植木師　中根師人

の諸氏にして、その外、公使館附武官には、柴砲兵中佐、守田歩兵大尉、中川陸軍一等軍醫の三氏あり。柴中佐は、わが水兵義勇隊の全隊を指揮すべく、守田大尉は、これを助くべし。又、義勇隊員中、川上貞信、山本讃七郎の二氏は、中川軍醫の助手となる事となり、中川、小川氏その他の夫人は、中川軍醫の助手となり、もしくは、

炊事の世話をなすことゝなりぬ。

九日、皇太后、皇上、頤和園より還られたり。その還御にさきだち、上諭一道あり。「近來、近畿一帶、拳民、事を釀し、人心浮動す。京城内に、三五、群を成し、刀械を執り、街市を游行するものあり。嚴に、取り締るべし。若し、形跡、疑ふべき者、もしくは、黨を結び、械を持ち、造言生事の者あらば、速に、捕拿すべし」とのことなり。依りて、この日より、歩軍統領（即ち、警視總監）等の部下は、各、手を分け、兵を率ゐて、城内を巡邏せり。實際、城内外ともに、多數の義和團、白日公然横行し居るも、各城門の守兵等は、義和

團の、所謂、神術を恐れて、敢て、手を下さゞるゆゑ、團匪は、明目張膽、青天白日、刀械を執りて、城門を出入し、街路を徘徊し、毫も、憚るところなきなり。政府は、この日に、造言滋事の匪徒一人を捕へたりとて、これを官報に、公にしたる外には、何等彈壓の實跡ありしを聞かず。この夜、又、蜚語あり。「團匪、この夜を以て、事を擧ぐべし」と、いふ。こゝに、城内各所に散在せる外國人は、悉く、自國の公使館、又は、海關に集合したるも、當夜、何事もなく過ぎぬ。日本人も、緩急、事に應ずる便宜上、公使館内、もしくは、その附近に集合すべしとのことなりしが、公使館は、手狹にて、多數の人を收容すべくもあらざれば、公使館と程近き筑紫辦館、及び、台基廠なる森海軍中佐の留守宅に集合せり。

十日午後、余は、狩野君と共に、東四牌樓北六條胡同なる、日本老公館内寓所より、台基廠に移りぬ。時に、義和團匪、通州の教堂を燒きたりと聞えたるが、午後、通州通信線、及び、張家口電線、共に、不通となりぬ。こゝに於て、内外の交通機關、全く絶え、北京は、重圍の裡に陷りし姿とはなれり。また、この日、端郡王外三人、總理衙門大臣に任ぜられ、端郡王は、同衙門事務管理を命ぜ

られたり。支那政府が、多年外交の衝に當りし慶親王を信ぜずして、端郡王をして、外務の首座たらしめしは、對外政策を一變し、强硬態度を執るべき意なること、こゝに、明白になりぬ。（服部宇之吉著籠城日記）

八、獨逸留學中の所感

普國は、嘗て、ナポレオン一世の大打擊を被り、國内、たほかた、佛軍の馬蹄に蹂躙せられたれども、後には、一擧して、佛國に克ち、ゼルマン聯邦の盟主となりて、威武を、歐洲に輝せるのみならず、商工業等を以てしても、英國を凌がむばかりに發達したるは、洵に、偶然のことにあらず。余は、その國の首府、伯林に往きて、はじめて、その理由あるを感じたり。

歐洲國民が、生活の度の高きことは、かねて、聞きしところなるが、英佛等の國に往き、目のあたり、その實況を見て、遙に、想像にも優れるに驚き、更に、ゼルマンに往きては、全く、想像と相反して、極めて、質素なるに驚きたり。ウヰルヘルム老帝が、勤儉尚武の遺訓を垂れられたることは、史上にれいて、ほゞ、知れる所なるが、その風の、かくまでに、洽く、行はれたりとは、更に、思はざ

りしなり。獨逸人は、この風に安ずるのみならず、これを以て、大に、誇るべきことゝせり。身分ある紳士すら、家にありては、裝飾もなき、素朴なる卓上に、冷なる肉と、一瓶の麥酒(カゲリケ)とを並べて、これを嘉肴とも、美酒とも志つゝ、滿足するなり。某の博士など呼ばるゝ、知名の人を訪ぬるに、書籍、紙片など、あたり狹きまで列ねたる、書齋に延き入れ、諄々として、學事を談ずるさまの、いかにも、質朴にして、その生活の儉素なるは、我が國人の思ひ到らざる所なり。倫敦、巴里を見たる眼にて、伯林を見れば、實に、僻陬の都會にすら及ばざる心地

するなり。

余は、一日、伯林より、程遠き地方に旅行して、ある家に宿りぬ。主人は、さばかり、教育ある人とも見えざりしが、余に、醃藏の肉と麥酒とを供し、「さて、遠來の珍客を饗應すべき物とてはあらず。われ等は、我が國の軍備と、教育とを完備せしめむがため、多額の租稅を上納せるを以て、平常、節儉せざるべからず。こは、ひとり、われ等のみにあらず、國民、みな、然るを以て、君も、これを諒せよ。されど、そのかはりに、我が國の教育と、軍備とを熟覽して、家づとゝもち給へ」など、いひぬ。國民一

般、この思想を以て、國家に對したれば、僅々たる歳月の間に、現今の如き、强國ともなりたるなり。而して、獨逸人は、かく、質素なるのみならず、最も、勤勉なる人種なり。いづれの國にても、我が日本の事は知るもの少く、我が國語を用ゐる者に至りては、絶無ともいふべき程なるを、彼等は、東洋に、商權を張る必要などのありてにや、學生の間には、我が國語を用ゐて、談話する團體さへ設けられたり。

古人、勤儉を以て、興國の本とせしが、獨逸の地を踏みて、始めて、その言の信なるを知れり。老帝の遺訓が、かばかり、國民の腦裏に徹底して、なほ、今日、實行せらるゝは、畢竟、大蹉跌をなしゝにもよるべけれど、また、國人の氣質にもよることなり。この氣風は、今より興起すべき、我が國民にとりては、最もよき模範たるべきなり。（日高眞實文稿抄錄）

九、ナポレオンの言行の一二

ナポレオンの好める格言は、「眞正の才智は、眞正の剛毅より出づ」と、いへるものなりき。まことに、彼は、勢力あり、疑惑なき心志を以て、よく、その功業を成就せ

しものなり。嘗て、その軍を行るとき、「前途にアルプスの大山あり」と、いふものありしかば、ナポレオンは、「われを妨ぐるアルプスあらむや」とて、直に、新道を開きて、全軍を通ぜしめ、古來、人跡の至らざりし大山も、容易に、これを越ゆることを得たりきといふ。

ナポレオンは、また、「能はず」と、いふことばを指し、「こは、愚人の字書に見ゆるものなり」と、いひて、いたく、これを擯斥せり。彼は、毫も、勞苦を厭はず。嘗て、一時に四人の書記官を用ゐたることありしが、皆、困衰して、堪ふること能はざりきとぞ。彼は、常に、かくの如く、自己の力を惜まざると共に、また、少しも、他人の力を惜まず。されば、傍人、いつか、その感化につれて、新に、精神を振起するに至れり。こゝを以て、彼は、常に、「われは、泥土より、我が部下の大將を作りいだせり」と、誇言せり。

ナポレオン、嘗て、人に語りていへり。「アルコラの役、われ、僅に、二十五騎を率ゐて、敵の大軍を破りしことあり。この日は、大戰、三日に亘りし後なれば、戰の最中に、敵も、味方も、忽ち、困倦の色をあらはせり。こゝこそ勝敗の轉機なれ、この時を失ふべからずと思ひしかば、急に、二十五人に命じて、人ごとに、喇叭を持たせ、敵

の左翼を突擊せしめしに、敵、果して、大に敗走せり。抑も、兩軍、相戰ふ時は、互に、敵を驚惶せしめむことを務む。我が軍中、もし、驚惶の念起らば、敵に敗らるゝこと、必定なり。その瞬息の時を、忽にすべからず。この時を愼み、敗を轉じて、勝となさむは、まことに、兵家の秘訣なり。總じて、敗れたる轉瞬の間隙ごとに、勝つべき轉瞬の機會あるものなり。墺太利人は、時の價値を知らず。ゆゑに、彼の躊躇する間に、われ、これを擊ち敗ることを得たりしなり」と。また以て、彼の用意を見るべきなり。

ナポレオン、靈變の智ありて、たかも、精細に、心を百事に用ゐ、遠大の見ありて、また、急速に煩務を治むよく、材能の士を重任すと雖も、苟も、事の重大なるものに遭へば、必ず、自ら辨理せり。かの、ポーランドにありし時の如き、フランスの軍は、バルサルヂ川に沿ひ、前には、露西亞の兵あり、右には、墺太利の兵あり、後には、また、新に征服せし普魯亞の軍ありて、まことに、四面、皆、敵の觀ありしかど、佛軍と、その本國との間には、文書往來の道、たばらくも絶えず。遙に、本國に令して、水道を通ぜしめ、道路を平坦ならしめ、通商貿易の事を

謀らしめたるは、さらなり、或は、學校修造の事を指示せしこともあれば、或は、宮殿の制を更造する教命を、匠人に與へたることもあり。或は、寺觀更築の規制を工師に授けたることもあれば、或は、土耳其、露西亞の帝王に、文書を通ぜしこともあり。その他、命令を下して、馬を得べき地を指示せしが如き、歩兵の爲に、靴を備ふることを命ぜしが如き、三軍の用ゐるパン、ビスケット、ブランデーの數を、逐一、記載して、營塞にれくらしめたるが如き、一々、枚擧に遑あらず。嗚呼、ナポレオンの如き、その身は、異鄉に居ると雖も、その心は、常に、巴里の帝都にあり、はては、遠く、全歐洲、全地球上の百處に往來して、暫時も、やすむことなきなど、その精勵、その用意、まことに、驚歎するに堪へたり。

一〇、長篠

勝頼、長篠の城を圍み攻むること、烈しかりしに、信長、東照宮と共に、後卷にあり。軍評定の時、酒井忠次、進み出で、「今夜、脇道より、長篠の附城鳶巢へれし寄せ、攻め破らば、勝頼、必ず、敗北すべし」と、いひもあへぬに、信長、あざ笑ひ、「汝は、三河、遠江の小迫合には慣れつれど、

大軍の計策は、知らざりけり」と、嘲られしかば、忠次、いふべき詞なくして、出でける程に、信長、東照宮にさゝやきけるは、「左衞門尉が申す所、最も、ことわるべし。また、呼びいだされよ」とて、忠次が側近く居より、「誠に、ゆゝしくも計りたるかな。されど、外に泄れ聞えむかと思ひて、わざと、詐りて誹りたり。疾く、馳せ向ひて、鳶巣を攻め破り候へ」と、いはれしかば、忠次、承りて、出でむとする時、又、引き止め、「同じくは、信長が向ひたき所なり。あたら、武功を汝に讓れり」と、いはれけり。忠次、大に勇みて、夜半ばかりに、思ひもよらぬ所にれし寄せて、武

田兵庫頭信實、三枝勘解由、和田兵部をはじめ、數多討ち取り、火を懸けたるが、その煙を、武田の軍兵、顧みて、大に勇氣ぬけて、終に、敗北せり。信長、後に、忠次が功を賞して、「汝は、前に、眼あるのみにあらず、後にも、眼あり」と、いはれしかば、忠次、忝きよし申して、「さては、終に、後を見たることはなく候ふ」と、いひければ、信長、笑ひて、「前後に謀たがはざるを賞せむとて、いひすごしたり」と、いはれければ、「仰の旨、面目あり」とて、退出せりとなり。（湯淺常山著常山紀談）

一一、殊勝なる武者振

秀康卿、越前に封ぜられ給ひし後、阿閉掃部とて、武功のほまれありし者を、厚祿にて、召し抱へられけり。又、狛伊勢とて、これも、國にて、世祿の歴々なりしが、嫡子に鎧の着ぞめせさせけるに、かの掃部を招待して、子に、鎧を着することを、頼みけり。さて、饗膳いでて、祝の盃に及びし時、伊勢、「今日は、愚息が、鎧の着ぞめにて候ふまゝ、御身の御武功の事、御物語り候ひて、彼に御聞かせ候へ」と、いひしに、掃部、「いや、某が身の上に、御話し申すべき程の、武功も覺え申さず候ふ。されど、御望、

默し難く候ふまゝ、某、一生の内に、武者振の見事なる士を、一人見申して候ふ。その事を御話し申すべし。」江州、志津が嶽の戰に、暮れ方に、某一騎、余吾の湖のわたりを引き候ひしに、敵とおぼしくて、うしろより、詞をかけし故、馬を引き返し候へば、その人、申し候ふは、「今朝より、かせぎ候へども、よき敵にあひ申さず候ふ。御人體を見うけ、幸とこそ存じ候へ。御不祥ながら、御相手になり申すべし」とて、進みより候ふ故、「それこそ、こなたも、望む所にて候へ」と、たがひに、馬を乘り放ち、既に、鎗をあはせむとおもふるに、その人、「おぼし、御待ち候

へ。今朝より、雜兵を、多く突き崩し候ふ故、鎗、よごれて候ふまゝ、鎗を洗ひ候ひて、御相手になり候はむ」とて、余吾の湖に、鎗をうちひたし、二三遍、洗ひつゝ、「さらば」とて、突き合ひしが、久しく、勝負なかりし程に、日も暮れはてゝ、物のあやめも見えずなりぬ。その時、あなたより、又、詞をかけ、「もはや、鎗先も見えず候ふ。御名殘多くは候へども、これまでにて候ふ。御暇申し候ふべし。御名こそ承りたく候へ。某は、青木新兵衞と申す者にて候ふ」とて、某が名をも承り候ひて、「この後、また、陣頭にて出で合ひ候はゞ、互に、人手にはかゝり申すまじく候ふ。もし、又、味方にて候はゞ、わりなく、入魂致し候ふべし。さらば」とて、立ち別れしが、これ程、見事なる武士は、つひに見侍らず。いかゞなりはて候ふにか」と、語りけるに、そのころ、伊勢がもとに、心安く、出入する青木方齋といふ浪士あり。その日も來りて、勝手に居たりしが、この物語を聞きて、にじりいでつゝ、掃部に向ひ、「さても、只今の御物語承り、今更、昔を思ひ、涙を落してこそ候へ。その時の、御相手になり候ふ青木新兵衞は、はづかしながら、われ等にて候ふ。かく申すばかりにては、うきたる事にたぼすべく候ふ」とて、その時の、

雙方の鎧の威、馬の毛色を、一々いひけるが、一つも違はざりければ、掃部、わどろきつゝ、「さては、久しくて、逢ひ候ひて、本望に候ふ」とて、手前にありし盃を、方齋にさし、これをゐるしにとて、腰の脇指を抜きて、ひきけり。それより、方齋が名、國に高くなりし程に、秀康卿の耳へも達せしかば、遂に、掃部と同じ祿にて、召しいだされたり。（室鳩巣著駿臺雜話）

一二、唐崎の松

七月廿一日、唐崎の松見むとて、未明に、京をたちて、白川越をす。湖水の眺望、いづれはあれど、白川の峠より見るを、よしとす。三井寺、これにつぐ。世に、近江八景の畫圖多しといへども、まのあたり見るには、遙に劣れり。八景、相去ること、たがひに遠し。白川山より見れば、一望千里、この好景、筆に及びがたく、詞につくしがたし。近く見て、ますます、うれしきものは、唐崎の松なり。北より南にさす枝、三十間ばかり、東より西にいたりて、廿間餘、幹は、ふたかゝへにあまり、木の丈、高からずして、まるく生ひ茂れり。洛陽妙心寺の松、たよび、住吉難波屋の松、いづれも、よしといへども、唐崎の松に

對しては、同日の論にあらず。實に、天下のひとつ松なり。傳にいはく、「唐崎の松、枯れたる時、明智光秀、栽ゑかふとて、

わが外に、たれかは植ゑむ。ひとつ松、
こゝろして吹け、志賀のうら風。

その後、それも枯れたれば、長嘯子、又、栽ゑられしが、それも、亦、枯れて、今の松は、近時、某侯の栽ゑられたるなり」といふ。松のめぐりには、垣をゆひ、崖には、石崖をして、いと嚴重に見ゆ。近年、枝條、ますます、垂茂するをもて、石を築き出すこと、ゑばゑばなりとぞ。松の前面に、唐崎明神、たゝせ給ふ。小社なり。ある人のいはく、「前の說、非なり。この松、すでに、四百年に及ぶか。その事、山門の記錄にあり」と、いふげにも、木だちのさま、百年以來のものにはあらず。傳記、なほ、尋ぬべきなり。（瀧澤馬琴著 羈旅漫錄）

一三、端艇につきて友人に贈る書

久しく、御近狀を詳にせざりしが、御起居いかゞ。山も水も清きあたりに、遊びくらされて、平生御自慢の水練術を、湘南の荒磯波に試みらるゝ愉快、さこそと

存じ上げ候ふ。

こちらにては、暑さ、日にまし、烈しくて、日中などは、殆ど、堪へ難きほどに候ふ。散歩もならねば、書見もなり難く、せめては、水風の涼しきあたりへと存じて、四五日前より、東京に殘れる諸友を催し集めて、日毎に、墨田川へ參り、例のボート漕習を試み居り候ふ。はじめのほどは、君達の留守中に、一かどの勉强をなして、來春のレース場には、人目を驚しくれむなどの、野心もなきには候はざりしかど、射るが如き日光の暑さに堪へかねて、折々は、岸邊の楊柳に舟を繫ぎ、洲邊の

蘆荻に櫂をとゞむるなど、遊行の方にのみ傾きゆきて、漕習のことは、いつか、全く、忘れ果て候ふ。かくて、不思議にも、僕等は、こゝに、今まで、嘗て知らざりし、一種の樂を見いだし候ふ。墨田川といへば、直に、ボートを思ひ、ボートといへば、レースより外なき樣にのみ、思ひ居りし僕等は、レース以外、ボートの樂の、更に、大なるものあるを覺えて、今は、中々に、棄て難くなり候ふ。そは、水の樂にて候ふ。

ある日、某先生を訪れし時、ふと、この事をいひ出でたるに、先生には、「君等は、よく、そこに心附かれしよ」と

て、昔の一橋時代の事など引きて、大に、ボート改良の事を述べられしが、その趣意は、他ならず、「ボートには、もと、レースのたのしみ以外に、水の樂といふものありて、ことに、都下ボートの漕習所たる墨田川は、下に、品海あり、上に、三叉の江ありて、房總の山々、さては、富士、筑波の晴嵐さへも、一目に、眺め渡さるゝ境なれば、その間に、船を放ちて、浩濤、漫波に、旬日苦學の胸を洗ひ、靜に、山光水色の風を賞して、春花秋月の趣を味はむは、まことに、この上もなき快事にして、昔は、これらも皆、ボートによりて得らるゝ樂なりしなり。されば、

同じ體育を目的とするものゝ中にても、兼ねて、心神をも養ふべき、好箇の遊戯として、われも、人も、競うて、ボートに赴きしなり。さるを、レースの技、年を追うて盛なるに從ひ、ボートといへば、たゞ、レースの爲とのみ思ひ、舟に上れば、レースコース以外には、船をやるべき所もなき樣に思ふことゝなれるは、まことに、惜むべきことにて、ボートの樂は、爲に、その過半を奪ひ去られたり」と、いふ事にて候ひき。

かくて、先生は、「君等の、心附きしを幸、これより、同志、相依りて、大に、その改良を圖られよ」とて、懇なる諭言

もありしかば、僕等は、一層、悟る所ありし樣に覺えて、同志と共に、日々、その事ども語り暮らし居り候ふ。いづれ、御歸京の上、くはしき事は、申し上ぐべく候へども、先づ以て、御賛成を願ひたく、こゝに、一書を呈し候ふ。早々。

一四、長良川の鵜飼

美濃の國長良川は、岐阜の稻葉山の麓を、流るゝ川なり。古くは、稻葉川ともいへり。水源は、同國郡上郡より出でて、郡上川といひ、武儀郡にて、藍見川といひ、そ

れより下を、長良川と唱ふ。末にては、墨股川ともいへり。この川、鮎多く、名物にして、諸國に冠たり。漁人の、鵜をつかひて、その鮎をとるを、鵜飼といひて、世に珍らかなるわざとす。夜毎に、月を厭ひ、闇を待ちて、船を浮ぶ。宵闇の頃は、日暮の程に、上の瀨に上り居て、飼ひ下すなり。

その鵜飼の數、長良人は、七艘、小瀨人は、五艘の船をならべ、船ひとつに、鵜匠一人、中鵜使一人、篙工二人乘り、船の舳先に、篝火をともし、鵜十六羽、各、その頭を、繩もて縻ぎ、繩のもとを、一つによせて、鵜匠の手に持ち、

水に放ちやる。この繩を、手繩といふ。この時、鵜匠、互に、聲を揚げて、勢を添ふれば、鵜は、鮎を逐ひて、たのがむきむき水底に潜り、とざまかうざま、行きちがふまに、蜘の巣の如く亂るゝ手繩を、いとたやすく操りさばきつゝ、片手には、鵜の呑みたる鮎を吐かせ、又、水に追ひ入れ、篝に、松を焚きそへなどして、とばかりの隙間もなく、たちはたらくなり。この船どもを連ねて、漕ぎ下すを見れば、篝の火影は、流をやき、雲に映りて、その景色、物に譬へむやうなし。

又、時によりては、卷狩といふ事をなす。これは、數多の船を、一つにならべ、川のよどみを取りまはし、或は、上り、或は、下り、篝の影いり亂れ、火花をちらし、われ劣らじと、船ばた、打ち叩けば、晝より明き水底に、鮎はれそれて、度を失ひ、前後左右に逃げまどふを、百餘の鵜は、互に、先をかけて爭ひ、此處の平瀨、彼處の片淵に、れひつめ、せめつめ、呑みては浮び、吐きては沈み、ちきりに、捕りてやまざるなど、見る人、興に入りて、時の移るを覺えず。世に、すなどりの業多しといへども、その奇絶なるは、鵜飼にしくはなく、鵜飼は、長良川にしくはなし。そを見るには、岐阜の稻葉山の麓あたりを、勝れ

たりとす。

この山の、長良川に臨める風景、支那の赤壁の畫に似て、いとれもしろきに、夕つ方より、暑さを避けがてら、小船に棹し、山陰に浮びて、瓢とりいだし、一盞を傾くる程に、川上の船伏山のかなたより、篝火の影、波にうつりて、花やかに見えそめたるは、霞のひまより、櫻の匂ひ出でたるにもまさりぬべし。文明年中、一條禪閤兼良公、當國に下り、厚見郡江口村にて、鵜飼を見られしことあり。又、慶長十六年には、東照公、元和元年には、將軍秀忠公も、岐阜に來りて、鵜飼を見られしことありぬ。その他、各諸侯、また、文人詞客の、この地に遊べるもの、世々に絶えざりしは、歌に詩に文に、よく、見るところなり。（三浦千春著美濃名勝誌）

一五、旅行の趣味

旅行して、他郷に遊び、名勝の地、山水の佳境に臨むは、人生の樂事なるのみならず、それがために、良心を感じ起し、鄙吝をあらひすゝぐなど、わが德をすゝめ、わが知をひろむるよすがともなるものなり。

かの、見馴れぬ山川の有樣を見、その里人に逢ひて、

その處の風土を問ひ、或は、奥まりたる山ふところに、岩根踏みて、尋ね入るが如き、そのたのしみ、いかにぞや。山水の癖ありて、青山、夢に入ること頻なる人は、心とゞまりて、歸ることも忘れぬべし。ことに、海邊の如き、眼界ひろきながめは萬戸侯の富にもまされり。

すべて、勝地佳境に遊びて、見聞することは、たゞ、一時の耳目を悅ばしむるはさらなり、幾年經ても、その時の有樣、思ひ出でられて、たのしみ、きはまりなきものなり。（貝原益軒著樂訓）

一六、霧島山に登る記 その一

海陸二日路をへて、霧島山に入り、數十町のぼりて、霧島の宮居の前に着く。二神、垂跡の地なれば、宮居、今に至りて、殊に、美々しく、この近國にての大社なり。伏し拜みて、黃昏に及びぬれば、傍の山下坊といふ坊に宿す。こゝにて、先達の案内者をやとひ、翌朝、同伴を乞へる若者と共に、夜の間より登山す。雜樹、生ひ茂げり、日影だに、洩れざるほどの山道を、たゞ、案内者のあとに從ひつゝ、のぼりにのぼりしが、その間、奇樹異草、名も知らず、目なれぬもの、いと多し。かくの如きところ、

五十町をのぼりつくせば、それより上は、樹木、一本もなく、たゞ、芝の如き草のみ、生ひたり。そこに至れば、四方、豁達とうちはれ、薩、隅、日の三州、一望の中にいりて、衆山は、波濤のごとく、大海は、青疊を敷きたるが如し。中に、櫻ぢま山、突として秀で、さながら、盆石をたきたるが如く、その頂より、白き煙、四時に立ちのぼるは、恰も、香爐などのやうなり。景色無雙、筆の及ぶところにあらず。さて、又、草ばかりの山を登ること、更に、五十町にして、それより上は、草もなく、たゞ、栗ほどの燒石ばかりなるが、山は、ますます、急峻なり。次第に、登るにた

たがひて、天地のけしき、やゝ變じ、不時に、下の方より、雨そゝぎ來り、或は、風、横さまに吹き來りて、又、眺望のいとまなし。

それより、二十町も登りしに、馬の脊越といふ處あり。こは、又の名を、御鉢めぐりともいふとか。この處は、登らずして、平に行くといへども、左右、皆、谷にて、劍の刄の上を行くが如く、足のふむところ、纔に、馬のせなかほどなれば、その危險、いふばかりなし。かくて、左の方は、萬仞の谷底にて、眼れよばず。右の谷は、深さ三四町、或は、五六町にて、谷にみちて、猛火燃えあがれり。こ

の馬の脊越にかゝりて後は、只、何となく震動して、地軸、只今、くだけ折れて、この山、微塵になるべきやうに覺ゆ。或は、腥く、えもいはぬ氣の、吹きたつよと思ふほどに、忽ち、墨の如くなる雲、うづまき來て、同行のものすらも、ひたすらに、かくるゝことあり。或は、前後左右に、異形の雲煙あらはれ、その狀、鬼神の如く、佛神の如きこともあり。或は、足もとより、虹たちのぼり、竪横になびきて、織りなせるが如くなることもあり。或は、天地、ともに、金色になることもあり。その外、奇怪不思議、なかなか、いふもれろかなり。また、折々、一陣の烈風、吹

きくることあり。この時は、先達教へて、急に、うつ臥に、倒れ伏さしむ。ばらばひにならざれば、風のために、この身をとられて、猛火のうちに、落さるといへば、われらも、この風をれそれて、少しの風にも、急に、うつぶしになり、地に取りつきて、風に放たれざるやうにせり。ちばしにて、又、急に、風もやみ、空晴るゝこともあるなり。須臾の變幻、さだまりあることなし。

一七、霧島山に登る記 その二

さて、この處に、かゝりしより、かの若者、大に恐れ、足

戰きて、立つこと能はず。されど、先達と、前後より介抱して、いろいろと耻ぢしめ、ためしが程は、引き行きしかど、後には、目見えず、顏色變ぜしかば、いかにともためがたく、殆ど、迷惑せり。時に、先達の、いふやう、「今日は、山も、格別にあらし。殊に、かゝる人、引き具し行かむこと、いかにも叶ふべからず。登山も、これまでなり。これより、下山すべし」と、いへば、力及ばず、本意なくも、それより下りしが、十町ばかりにして、天氣、また晴朗、風れもむろに、四方の眺望、はじめの如くなりぬ。ためばらく、休息して、心を鎭めしに、若者も、けしき、常の如くなりて、

「さきには、いかにして、さばかりは、れそろしかりつるにか」と、うち笑ふ程なり。われ、つくづく思ふに、今、この若者のために、予までも、絶頂を、きはめずして、下山せむこと、生涯の遺憾なるべし。何とぞして、一人なりとも、登り見むとて、先達に、「これより、絶頂までは、道の程、いかほどあるか」と、問ふに、「馬の脊越の長さ八町、それを過ぎて、急に登るところ、十町ばかりもやあらむ」と、いふ。「さては、纔の道なり、まぎらはしき道やある」と、問ふに、「兩方谷なれば、紛るべき道なし」と、答ふ。「さらば、あまり、殘念なれば、予は、獨歩して、絶頂に登るべし。この

處に、若者を守り居て、わが下り來るを、待ちくれよ」とて、とゞむるをも聞かで、再び、登りぬ。

さて、前の馬の脊越に至りしに、天地、忽ち變じて、また、はじめのごとし。例の折々、うつぶしになりて、風を避け、千辛萬苦して、馬の脊越八町が間、走りぬけたるに、天地、また、常の如くにして、奇怪なし。たゞ、息をかぎりに登る程に、遂に、絶頂にいたれり。絶頂は、尖りて、纔の地面に、天の逆鉾あり。そを見つけたる時のうれしさ、何にかたとへむ。逆鉾のありさま、全體は、唐金の如くに見ゆれども、風雨にさらせるものなれば、青く錆

びて、ほかとは知れがたし。長さ、一丈餘ばかり、ふとさ大なる竹程にて、さかさまに、地中に立ち、その石突の端のところに、南面に、鬼面の如きもの見ゆれど、これも、風雨にさらされて、鼻目、ほかとは、わきがたし。土中に入りたる先の方は、何程深く入りたるか、知るべからず。かくて、絶頂には、只、この鉾一本のみにて、外に、堂宇等の如きもの、一つもなし。ほばらく、この絶頂に徘徊するに、天氣晴朗にして、四方、目の及ぶかぎり、心地よく、見え渡れり。されども、かゝる處は、久しく留るべきにあらざれば、いそぎ下りたるに、馬の脊越に至れ

ば、猶、前のごとく、天地晦冥にして、怪異、甚し。恙なく、馬の脊越を越えて、ひた下りに下るに、遙の下に、先達、若者、かすかに見えて、大さ、豆のごとし。嬉しくて、いそぐほどに、下るとはなしに、すべり落ちて、須臾の間に、二人の前に着く。恙なかりしことをのみ、ともに悅び、その夜、くれ過ぐるころ、宮居のかたはらの、坊にかへりぬ。（橘南谿著西遊記）

一八、夜旅（足代弘訓詠）

ゆきくれて、
志らぬ野道に、
たづぬれば、
うれしくも、
見えそめぬ。
里あるかたを、
かなたの森に、
ともし火の影、

一九、半家村

土佐國、幡多郡の、半家村といふ里は、四万十川の水源にて、左も、右も、水を挾みて、巖壁、きりたちたれば、世ばなれて、人うとき處なり。古くは、家、五六十戸ありしが、れひれひ、人口、れほくなりて、今は、七十一戸になれりとぞ。その風俗、愿朴にて、すこしも、今様めける事に

移らず。農工商、入りまじり、産業異りといへども、情誼、ともに、あつくして、吉凶禍福、あひ救ひ、田租をはじめ、れよそ、公に納むる物、皆、期にさきだちて、たてまつり、未だ、郡吏の督促を受けしことなし。されど、或は、齢老いし、親の侍養のため、或は、自己の疾病のため、業を怠るたぐひ、山中の民といへども、もとより、遁れぬところなれば、れのづから、富めるも、貧しきもありて、ことごとく、均しくはあらず。若し、さる者ある時は、村中、語らひあはせて、共に、共に、力を添へ、賦役をとゝのへしめて、破産に至らざらしむ。故に、凶荒の歳に遇ふといへども、更に、逃亡流離の者なし。されど、又、たまたまは、恒の産なき浮浪の者もなきにあらず。これをば、間人と呼べり。間人のたぐひは、何處にもありて、皆、公役をつとめぬものなるを、この半家村の間人等は、公役をつとめて、恒の産ある者に同じ。ある役人、これを怪みて、「汝等は、公役すべからざるものなり。然るを、猶、つとむるは、村人、れのれ等が勞を分たむがために、汝等に推しれよぼすにあらずや」と、いひければ、間人等、同じ聲に答へて、「さかには侍らず。己等、不幸にして、間人となれりと雖も、朝夕、やすく、この村中に眠食するは、皆、

公の御蔭なれば、その國恩、報いずてやはあるべき」と、いへり。さる者どもの中には、無賴の徒もあるべきを、この村の間人は、かくの如し。

今は、昔、享保の末にやありけむ、八右衞門、新右衞門といふ二人の者ありけり。同じ程に、病に臥し、久しく、農業を廢して、いつしか、貧乏になりにければ、家に傳へ持ちたる田畠を、公に奉りて、間人にならむとせるを、庄屋某、聞きて、「かの二人は、處につきて、舊き家柄の者どもなり。然るを、病ゆゑに、產を破らしめむは、誠に、憫むべき事のかぎりなり」と、村人を諭して、かはるがはる、その田畠を耕し作らしめ、遂に、間人になる事をまぬがれしめけり。そのよし、國主に聞えけるに、村人等が看護のいたづきをめで、米四十三俵を、各戶に分ち賜ひけり。されど、さばかり厚き褒賞をも、あながちに、榮としも思はず。さるは、かく、互に、救ひ合ふなどの事は、皆、同保當然の職分なりとして、公の賞賜を却りて、怪しく思へばなり。

かく、七十餘戶、悉く、一家の思をなして、世を過すまに、宅を構ふるにも、村中、相戒めて、たとひ、餘財のある者とても、ひろき造作をば、堅く禁じ、梁木三間に餘

るをば、用ゐしめず。また、その土産の、茶、楮皮、葛粉、蕨縄の類のものは、皆、村中均分し、又、租米を獻るにも、たとひ、田地に豐耗のわかちありと雖も、収むるところを合せて、これを輸す故に、少しも、多寡の偏あることなし。されば、さきにいへる間人といふもの、稀には、なきにしもあらざれど、貧富の差、さのみなければ、かの朱陳村の故事さへ思ひ出でられて、めづらしさのあまり、一筆こゝにかきとゞめぬ。（近藤芳樹著明治孝節錄）

二〇、種々の生業

木曾の山中など、深山幽谷にて、岩茸を取るには、畚といふものを造りて、綱をつけ、夫は、それにいり、妻は、それを、木々の枝よりさげて、釣りれろし、引き上げなどして、取るとぞ。下は、幾丈ともかぎり知れざる所なるよし、見し人、物語れり。もし、過ちて、綱のきれて、落ちたらむには、命なかるべし。

又、伊勢の浦にて、海人の、鮑とるには、乳呑子など引きつれて、櫂をつかひ居て、舟もやひするに、妻は、海底に飛び入り、こゝかしこ、貝を求むるをりしも、子の、乳を尋ねて、よゝと泣く聲の、水底にきこゆるに、今ひと

つ得まく思へど、その聲にひかされて、浮び出で、舟ばりに取りつき、息もつきあへず、子に乳をそふる、そのありさま、哀にして、實に、惻隱の心も發動すべし。

世わたるわざ、さまざまなる中に、かゝる、すぎはひする輩もあるものを、家にありて、その日を、無事安樂にすごす身は、いとありがたきことにあらずや。（柳澤淇園著雲萍雜誌）

二一、松島

松島、嚴島、天の橋立、世に稱して、日本三景といふ。中

にも、松島は、天然の奇景、四時に隨ひ、朝夕に變りて、窮ることなく、區域、廣大にして、日をふれども、飽くことなし。松島といふは、總名にて、その内に、數多の勝地あり。世に、八百八島ありなどいふは、大小の島々、數多きをいふなるべし。

松島村に屬して、名ある島、三十五あり。その餘、他村に屬して、松島の海面にある島々、碁局に、石を並べたるが如く、いづれも、爭ひて、奇狀を呈す。その中、最も、名高きは、雄島なり。島々、いづれも、天造の自然に出で、前後、さまざまの佳景をなし、棹をすゝめ、柁をめぐらす

に隨ひて、千態萬狀、數へ盡しがたければ、里人といへども、あまねく、その名を知らざるもありとなり。されば、うち見たるさまにては、八百八島といはむも、たろかなり。

東海は、いづれの處も、日和よく風靜なる時だに、浪あらきを、松島は、數十の島さゝへたるが故に、海面平にして、鏡の如く、島々には、松樹多く、根を巖によせ、枝も幹も、海風に撓められて、屈曲偃蹇したる狀、臥すが如く、倒るゝが如し。大小の島々、みな、斷岸となり、或は、樹根をあらはし、或は、奇石を出す。その狀、筆の及ぶべ

きにあらず。鳧鷗は、人に馴れてたどろかず。大魚は、岸にちかづきて躍る。その風景のうるはしきこと、晝夜、旦夕を隔てず。ことに、見事なるは、雪の旦なり。（作並清亮著三勝概言）

二二、天橋立

丹後の國天橋立は、與謝の海中にある長洲にして、三十六町あり。土人、浮島といふ。松樹、並木のやうに連れり。「碧海中央六里松」と作りて、詩人、六里松と稱す。明神の社の近所、松樹茂りたる處を、濃松といひ、疎なる

處を、淡松といふ。濃松には、雜木も生ひまじりたり。故に、下紅葉するよしを歌によめり。俗に、三保は、梢ひとしく、橋立は、一の枝そろひたりといへるは、眞にや。二町ばかりの舟渡ありて、九世渡といふ。世に、きれとの文珠といふは、これなり。明神のある方も、文珠堂のある方も、共に、橋立なり。堂のある方六町ばかり、明神のある方三十町ばかりなり。堂のうしろは、竹木、生ひ茂りたり。宮津より、橋立まで、二十八町あり。西は、青山、屏風の如く環り、南は、大山、巍々と聳え、北は、越の海、渺々と湛へて、千里一眺望なり。春の霞、秋の月、朝の晴、夕の

雨、景象、一ならず。げに、天下の奇觀、心も詞も及びがたき靈境なり。烏丸光廣卿の、

君とはゞ、見ずば知らじと、答へまし。
ことのはもなき、天のはしだて。

と、詠じ給ひしは、げに、感深きことなりけり。內外の濱、白糸の濱、万代濱などいふも、この橋立の別名ならむか。その外、橋立によみあはせたる名所多し。いにしへは、帝の御幸もあり、將軍の文珠詣もありき。今も、詩人歌人の來遊、絶ゆる時なしといふ。（貝原益軒著勝景圖記）

二三、人の三景の優劣論を駁する書

拜啓、日本三景優劣論の一篇、御寄贈下され、たもしろく拜讀仕り候ふ。例の流麗なる御筆、いつもながら、敬服の外、これなく候ふ。たゞ、その御論旨に至りては、余は、不贊成に候ふ。

優れるものを、優れりといひ、劣れるものを、劣れりといふは、平凡なりとて、優れるものを、劣れりと論じ、劣れるものを、優れりと論ずるは、文章家の弊なり。兄の文は、その弊を襲ひ給へるやう思はるゝは、余の僻目か。これ、その一。三景、共に、たなじ海上の景色なれど

も、春夏秋冬、その季節によりて、景色を異にせり。たとへば、松島の雪の如き、嚴島の紅葉の如き、天の橋立の時雨の如き、皆、各、特色あり。然るに、兄は、夏期にのみ遊覽せられて、その優劣を論ぜらるゝは、あやまれり。これ、その二。松島に行きても、月のある夜と、月のなき夜と、その景に、大差あり。嚴島に行きても、鹿の鳴くころと、鳴かぬころと、その感、たなじからず。天橋立に行きても、成相山より見たると、樗峠より見たると、その趣、かはれり。兄は、まだ、そを知り給はぬにあらずや。これ、その三。人の、風景に對するや、わが身の、健康不健康に

よりて、愉快にも、不愉快にも、感ぜらるゝものなり。病氣のをりなどは、いかなる風景に對するも、さまで、れもおろしともわぼえぬものなり。松島、はた、嚴島、はた、橋立に行き給ひしをりの、兄の健康は、決して、同一にてはわはせざりしならむ。これ、その四。同伴者の、風流不風流にも、關係あるものなり。宿屋の、心切不心切にも、關係あるものなり。兄は、それらを、一切、うち捨てゝ、公平に、判斷せられしか否。余は、疑なきこと能はず。これ、その五。

余は、この五の外に、更に、兄に向ひて、述べざるべからざることの候ふ。それは、人には、愛鄉心といふものあることにて候ふ。その土地に生れたるものは、その土地の風景が、ことに、よく見ゆるものなることは、人情の自然にして、誰も、免るゝこと能はざるものに候ふ。故に、三景の優劣論の如きは、その三景の、いづれにも、關係なき人に讓るべき問題にして、兄の如きは、そを論ずべき資格のわはせぬものと存じ候ふ。かく、兄の優劣論を駁したる上は、余の優劣論は如何との、御尋もあるべけれど、余も、亦、三景の一をもてる國に生れたるものにて、その資格なきものなれば、別に、申し述

べずたゞし、卑怯と思召さば、それまでにて候ふ。頓首。

二四、古今傳授松の碑文

丹後の國なる田邊の舞鶴城は、天正の昔、わが祖、細川三齋の築けるものにて、その父、幽齋の居城たり。幽齋は、弓矢の道は、さらなり、和漢の學に通じ、ことに、歌の道に堪能なりしは、世の、あまねく認むる所なり。嘗て、九條植道より、源氏物語の奥義を受け、三條西實枝より、古今集の秘訣を傳へられしが、當時、公卿に、その人なく、これを知るものは、たゞ、幽齋一人のみ。

慶長五年の秋、石田三成、兵を遣して、舞鶴城を圍む。城兵、僅にして、防ぐべくもあらず。幽齋、心に決する所あり、古今相傳の書類を、皇弟智仁親王に奉らむことを請へり。後陽成天皇、きこしめされ、幽齋の失せなむには、それと共に、歌道も亡びなむとて、いたく、歎かせ給ふ。かくて、親王、使者して、「和議を調へ、はやく、城を出でよ」と、諭さしめ給ひしに、「ありがたき仰にはあれど、生きながら、城を、敵に渡さむこと、武士の本意にあらず」とて、たゞ、その御使に託して、古今相傳の箱、及び、「古も今も」と、いふ歌添へたる證明狀を奉れり。されど、な

ほ、その人を惜ませ給ひ、ゐばゐば、内使を下して、和議の沙汰に及ばれしかど、必死の決心、容易に、飜さず。こに、勅使として、三條西實條、中院通勝を、大阪へ、烏丸光廣を、田邊へ遣され、ことに、光廣には、前田義勝を伴はしめて、あらためて、叡慮の旨をさとさしめ給ひしに、幽齋、今は、拒み奉ることかなはず、城を、義勝に渡し、わが身は、龜山に出でゆきぬ。あとにて見れば、園の老松の下に、古今傳授松の五字に、玄旨とゐるしたる札殘れり。こは、これ、古今相傳の書類を、親王の御使に渡したるところなりきといふ。

寛文八年、牧野親成、城主となりしが、その時までは、その札の存せしかば、やがて、その歌の句のことばをとり、その園を、心種園と稱し、代々、これを敬慕珍愛せられて、明治の御世に至りぬ。かの松は、文政の末に枯れ、そのあとに植ゑたる松も、廢城の折、なくなれり。

こゝに、この地の心ある人々、その遺跡の、埋沒せむことを恐れて、更に、また、松を植ゑ、碑を建てむとす。余は、その子孫なり。追慕の情に堪へず、謹みて、そのゆゑよしを記しぬ。（細川護成撰文）

二五、軍港

わが海軍にては、現今、四箇所に軍港を設く。相模國横須賀、安藝國吳、肥前國佐世保、たよび、丹後國舞鶴の四鎭守府、これなり。横須賀、吳、佐世保の三鎭守府は、創設、日、既に、久しく、百事、整頓の運に歸したれども、ひとり、舞鶴鎭守府のみは、漸く、開府の運に至れるまでなり。また、北海道附近にも、一軍港をたかるべきなれども、その位置、いまだ、さだまらず。

そもそも、軍港とは、軍艦、水雷艇をはじめ、海軍に屬する諸船舶の定繫所にして、作戰の計畫、出師の準備、

船艦の造營修理、兵器、たよび、諸品の供給をなすべき、海軍の策海地なり。かく、邦國必須の要鎭たるを以て、鎭守府には、特に、司令長官をたきて、これを總轄せしむ。軍港内には、かならず、造船廠、造兵廠ありて、軍艦の建造修繕を遂げ、大砲、水雷、その他、各種の兵器を製作せり。又、海兵團ありて、水兵、機關兵、木工、鍛冶、看護、主厨、軍樂生等を教育して、船艦乘組の補充に備ふ。その他、病院、監獄、測器庫、砲銃倉庫、法衙、哨營に至るまで、悉く、みな、備れり。

鎭守府に隷屬せる軍艦には、警備艦、練習艦、測量艦

等あり。各、その役務を異にし、動作、また、從ひて、區々なり。警備艦とは、常に、各地方を巡航して、鎭守府管區内近海の航行をつとめ、測量艦は、いまだ、調査を完うせざる港灣を驗測して、海圖の調製に任ず。おかして、現時、役務にあらざる軍艦は、すべて、豫備艦となし、軍港内に繫ぎ、或は、修理し、或は、休養せしむ。

また、鎭守府管轄以外に、堅甲鋭利の新造艦十餘艘を以て、常備艦隊を編成し、艦隊司令長官の麾下に集めて、船艦の演習、戰術の研究を遂げしめ、時に、或は、内外國の沿岸を巡航して、海軍諸般の材料を、視察調査

せしむ。

帝國の軍艦、ならびに、水雷艇は、外舷、および、檣桁、烟筒、または、大砲、端艇等、外面にあらはれたるものは、悉く、雪白に塗り、水線以下は、全く、赤色の防錆劑を施せり。然れども、戰時にれいては、船體を、薄鼠色に塗り換ふ。これは、目だたぬ樣になすものにて、敵地の偵察、或は、砲臺攻擊などには、大切の事なり。軍艦の外部は、かくの如く、塗抹すといへども、たゞ、烟筒の上端のみは、常に、純黑に染む。また、その腹部を一周して、外舷を横さまに一貫せる識別線は、或は、黑、或は、赤、或は、青、或は、

黄なる彩色を施し、以て、姉妹艦の辨別を容易ならしめ、艦尾には、金色を以て、和字の艦名を書し、舳艫には、大かた、菊花の御紋章を鏤飾せり。（若林欽著海軍生活）

二六、トラファルガルの海戰その一

ナポレオン一世、身を、陸軍の一將校より起して、忽ち、佛國の帝位を踐み、四方を制壓して、天下を睥睨するや、列國の群雄、皆、震慴屏息して、その部下に屬せしが、ひとり、英國のみは、孤立を守りて、敢て、屈せず。その島國たるを利用して、優勢なる海軍を備へ、海上の權力を握りて、ゑばしば、佛軍を惱したり。こゝにれいて、ナポレオン、畢生の力を竭し、雄兵十五萬を、ツーロンに集め、船舶二千三百餘隻を、海岸に浮べ、二十餘海里の海峽を一躍して、英國を粉碎せむと欲し、まづ、艦隊を、四方に分ち、以て、英國艦隊を、他に導き、その虚に乘じて、陸兵の大輸送を行はむとせり

英國の海軍提督ネルソンは、かねてより、ナポレオンの猖獗を制し、歐洲人民に、自由を與ふるを以て、おのれの天職なりと確信し居たりしが、いま、ナポレオンの大擧して、英國を侵畧せむとすと聞き、「佛帝、たと

ひ、鬼神の術ありとも、その海岸を去る一海里の外に出でゐめじ」と、いひて、直に、敵の艦隊を追尾して、ケーデス港附近にいたりぬ。時に、佛國の提督ウェルナブ、西班牙艦隊と相合し、四十餘隻の軍艦を督し、死を決して、英國艦隊と戰はむの用意をなせり。ネルソン、これを悟り、三十餘隻の軍艦を率ゐ、進みて、トラファルガル岬の邊に達し、遂に、敵の艦隊と相會す。時に、西曆千八百〇五年十一月二十九日なり。

ネルソン、敵の横陣を布くを見て、喜色、面に溢れ、總艦隊を分ちて、二隊の縱陣となし、副提督コリンウードをして、その一隊を指揮せしめ、風下に方れる敵の後殿艦より、第十二位に列せる艦間に進入すべきを命じ、みづからは、他の一隊を率ゐ、敵陣の中央を突貫して、まづ、その一部を擊破せむとせしが、佛將ウェルナブ、これを察し、その艦隊を、二列に排布し、前隊各艦の間に方り、後隊の各艦を列せしめ、相依りて、空隙なからしむ。

時に、英國艦隊の旗艦、ヴィクトリー號の上甲板に佇立せるネルソン、側なるブラックウードを顧みて、「汝は、幾何の敵艦を捕獲せば、わが勝戰なることを是認す

べきか」と、問ふ。ブラックウード、「十五隻を捕獲せば、以て、偉功となすに足らむ」と、答ふ。ネルソン、頭をふり、「否、われは、廿隻を捕獲するにあらざれば、滿足すること能はざるなり」と、いふ。やがて、その室に赴き、正裝して、燦爛たる幾個の勳章を、胸間にかけ、肅然として、天に向ひ、「神よ、願くは、わが英國に、赫々たる大勝を授け、全歐の人民を、その塗炭の苦より救ひ給へ。願くは、わが將卒をして、一人も、卑怯の擧動をなすものなからしめ給へ。併せ願くは、戰勝後、わが軍の事を處する、一に、仁慈を以てせしめよ。ネルソンの一身、もとより、惜むに

足らず、たゞ、わが忠誠を憐みて、應護を垂れ給へ」と、禱りて、やがて、甲板に出でしに、敵艦、いよいよ、近づく。英軍の意氣、ますます、壯なり。ネルソン、また、ブラックウードを顧みて、「なほ、一信號旗の掲げざるべからざるものあり」とて、急に、信號兵に令し、信號旗を、檣頭に掲げしむ。その信號は、「英國は、期して、各自が、その本分の職を盡すを待つ」と、いふことなり。英國總艦隊、これを望みて、狂喜、わくこと能はず、拍手喝采の聲、海波も、爲に、震飜せむとす。ネルソン、莞爾として、「今は、はや、準備にたいて、遺憾なし。餘は、たゞ、神とわが正義とを賴まむ

のみ」と、いひしが、やがて、「接戰せよ」との信號旗は、檣頭たかく掲げられたり。旗艦ヴィクトリー號、前驅卒先して進みしが、着彈距離に達するや、數隻の敵艦、これに向ひて、砲擊を開始し、飛彈、こもごも、ネルソンの頭上に轟く。ブラックウード、その本艦に歸らむとして、ネルソンと握手しつゝ、「余は、また、速に、本艦に來りて、敵艦二十隻を捕獲せる、閣下の壯貌を拜すべし」と、いへば、ネルソン、「われは、既に、國家の爲に、一身を犧牲にせむとせり。再び、相語ることを期せず」と、いふ。意氣軒昂、爽快の色、その眉宇の間に溢れたり。

二七、トラファルガルの海戰その二

時に、副提督コリンウードの旗艦、ローヤル、サブェリン號は、その隊の先登に進み、健帆、風を孕みて、西班牙の戰艦、サン、タアンナ號に向ひて、直進し、その艦尾に達するや、二彈を重塡せる左舷の大砲を、一齊に、發射し、忽ち、これを擊破せり。ネルソン、遙に、これを望み、欣然として、左右を顧み、「好丈夫の意氣を見ずや、猛烈、鬼神の如し」と、いふ。既にして、佛の諸艦、皆、ヴィクトリー號を目がけて、進み來りしかば、飛彈、實に、急雨の如く、艦

體壞破し、索具、斷絶し、兵士の戰死するもの、頗る、多かり。然れども、なほ、堅く忍びて、一發も應砲せず。ますます、進みて、佛の提督ウェルナブの旗艦を求む。ウェルナブ、これを避けむがため、殊更に、將旗を揭げざりしも、ネルソン、その陣形よりして、第二位にあるブーセル號の旗艦たることを看破し、猛然、これに薄り、まづ、艦窓に向ひて、小銃五百の一齊射擊を行ひ、續いて、三彈を重塡せる左舷の大砲を、一時に、發射せり。その音、百雷の、一時に落つるが如く、敵兵四百、算を亂して殪れ、二十門の巨礮、毀損し、艦體、大破して、また、用ゐること能はざるに至れり。

こゝに、ネルソン、いよいよ奮戰して進み、右舷の諸砲を以て、別に、敵艦レヅータブル號を砲擊しつゝ、遂に、これに衝突せり。この時に當り、英の諸艦長、各、猛進して、佛艦と接戰し、兩軍の戰、正に、酣にして、奮鬪、殆ど、一時間ならむとするをりしも、レヅータブル號の檣樓より、一發の銃丸、飛び來りしが、甲板上を急走せるネルソンの肩に中りて、これを倒せり。衆、駭きて、相集り、直に、ネルソンを扶け起しぬ。ネルソン、艦長ハーディーを見て、「佛奴、われを狙擊したるがため、彈丸、わが脊

髓を貫けり。恐くは、また、起つあたはざるべし」と、いふ。かくて、ネルソンは、わが負傷の一事、徒に、兵氣を沮喪せしむることあらむとて、徐に、手巾をいだし、わが面部と勳章とを蔽ひ、擔はれて、治療室に入りぬ。

時に、レヴータブル號の兵士、艦上に襲擊隊を組みて、將に、突入し來らむとす。英兵、急に、小銃を亂射して、これを却け、なほ、大小砲を連發して、その過半を殪しゝに、彼は、力つきて、遂に、降伏せしが、つゞいて、敵艦の、その旗章を下して、降を乞ふもの、頗る、多かり。ウィクトリー號の兵士、拍手して、歡聲、雷の如し。ネルソン、治療室にありて、これを聞き、思はず、笑を漏せり。

ハーデー、たまたま、子ルソンの側に來り、「捕獲の敵艦、十二隻に下らず」と、いひしに、ネルソン、「わが艦の、敵に降れるものなきか」と、問ふ。ハーデー、聲に應じて、「一隻もなし」と、答ふ。ハーデー、やがて、甲板に上り、一時間を經ずして、再び、訪ひ來りしに、ネルソン、その艦隊をして、投錨せしめむとの念、切なりしかば、その事を、ハーデーに命ず。ハーデー、「艦隊の運動は、副提督コリンウードの指揮に任せ給へ」と、いひしに、ネルソン、頭をふり、「苟も、わが殘喘、なほ、存する間は、何ぞ、指揮の權を、

他人に委せむや」と、いふ。既にして、薄暮に至り、佛西兩國の聯合艦隊、大敗して、砲聲、全く收り、ネルソンの氣息も、また、奄々たり。左右、口を、その耳朶にあて、「全勝、わが軍に歸し、敵艦二十隻を捕獲せり」と、報ぜしに、ネルソン、莞爾として、遂に、瞑せり。（小笠原長生著海軍史論）

二八、　赤道直下の一日

汽船に乘りて、赤道直下の大洋にありと、想へ。見渡せば、水天相交はる東の方には、棚引く雲、紫がかれる紅の色を帶び、入日の山の景色にも似たり。靜けさ、美しさ、名狀すべからず。さるほどに、雲は、愈、ゆらめきて、色は、愈、紅となり、寄せ來る波は、一波ごとに、そのうねり、漸く、高し。

やがて、太陽は、燦爛として、輝き出でたり。都會にては、今頃は、囂々として、熱鬧の始る時刻なるべけれど、こゝ、大海原の眞中は、天地、なほ、眠れる如く、靜なり。

何時しかに、雲は、散じたり。波は、漸く、高けれども、激するものもなし。陸地近き海ならば、鳥も來り、舟も見ゆべけれど、こゝは、一物の、眼を遮るなく、四顧、茫々たるのみ。されど、暑さは、一刻毎に迫り來ぬ。赫々たる

太陽は、既に、中空に上りたり。竈より來る如き風は、却りて、暑氣を加ふるのみ。

さる程に、又も、雲出でたり。其の色、灰色にして、其の形、或は、山の如く、或は、獸の如く、人の如く、兎の如く、かなた、こなたに漂ふ。終に、相重疊して、色、ために、黑ずみ、いつしか、太陽の全面を覆ふ。見るうちに、電光閃き、雷轟く。忽にして、雨、沛然として、横ざまに降り來る。風吼え、浪怒り、凄じき景色となれり。

暫くして、强雨歇む。太陽は、既に、中天を過ぎたり。見れば、一隊の魚群、洋面に浮びて、自由に游泳す。常は、三十丈も深く潜むといふ鱶すらも、尾鰭をはたらかして、出でて游べり。新空氣を呼吸せむとてなるべし。妨ぐる人もなく、追ふ舟もなければ、悠々たるもの、潑剌たるもの、千狀萬態なり。奇觀、いふべからず。涼風も、また、徐に、吹き來ぬ。

時刻の過ぎゆくにつれて、太陽、將に、波間に沈まむとす。紅の雲は、西の方の水平線を籠め、空も、水も、その光景を改む。見るうちに、太陽、波間に沈みて、餘光、長く、天の一方を照し、空や、雲や、紅、黃、紫の三色に輝き、洋面に交映し、まばゆきばかりの壯觀を現ず。やがて、其の

光、其の色、やうやう、水平線下に退けば、太洋の全面、四方より、黑みそめて、終に、眞黑となり、只、凉風に、波聲の高きを聞くのみ。（坪内雄藏著高等科國語讀本抄錄）

二九、カナダ鐵道

明治三十一年七月廿日水曜、午後一時に、「カナダ鐵道、紐育に向ひて、發車すべし」と、いへば、朝の中に、稅關の手續、荷物の發送など、とり行ふ。時到りて、乘り込みしに、汽車は、たゞちに、東をさして進みに進む。昨日までは、波をのみ見し眼に引きかへて、今日は、野山の景色を、手に取る如く見る、いと、心地よし。抑も、この汽車は、カナヂアン、パッヒック、レールウェーと稱へて、我が國にては、いまだ、行はれざる、廣軌鐵道なり。われ等一行の乘れるは、トンキンと名づけたる室にして、寢臺つきの一等車なり。こゝに、この車の構造の一斑を記さむに、客室は、一等三室、二等二室にして、一室毎に、たよそ、二十五人を容るべし。この外に、喫烟室、および、化粧室あり。飲食室は、一等二等を通じて、一室を設く。更に、見物車とて、風景を見る爲に、臨時に、一室を付くることあり。いづれも、その中を通行することを得れば、用あ

る人は、勝手に、隣室にも往來すべく、自在に、いかなる室にも尋ね行くことを得べし。その室内は、天鵞絨張の椅子を、むかひあはせに据ゑ付け、天井は、楓のごとき板の、いと、見事なるものを用ゐたり。この中に、特別室といふがありて、別に、一圍になりたり。こは、夫婦の旅行するをり、若くは、小供づれのものなど、多く、使用すといへど、われ等は、特に、この室を借り切りて、一國を成せり。

　　れしなべて、下には、絨氈を敷き詰め、天井には、空氣ランプを、處々に下げ、窓は、かならず、二重ガラスにて、窓掛は、高尚なる、唐草やうの模樣を織りなしたる、緞子を用ゐたり。夜になれば、ポーター來りて、腰掛け居る椅子をひき出せば、たちまち、變じて、寢臺となるだに珍しきに、かの、天井を引きれろせば、これも、美しき寢臺となりぬ。やがて、寢につけば、前に、幕を垂れて、互に、その姿の見えざるやうにす。されば、進行中の汽車にありて、帶紐解き、足さし伸べて、睡眠する事を得。これを、我が國の車中にありて、人の頭に足を載せ、ようせずば、脇腹など蹴られて、うちうめかむさまに比すれば、殆ど、月鼈の差ありとも、いふべからむ。

ヴァンクウバーを發して、程なく、山合となれるに、杉の大木ども、幾億萬かあらむ、悉く、枯れはてゝ、立ち並べるを、「いかなる故ぞ」と、問へば、「こは、二十年あまりも續きたる山火事ありて、今より、十年ばかり前に、やうやく、鎭火したりし跡なり」と、いふ。名高き落機山脈より、遂に、ヴァンクウバーまで、押し廣がりたる大火事なりければ、消すべきやうもなくて、このありさまに及べりとぞ。以て、この山脈の、いかに、宏大なるかを知るべし。されば、遠くより、これを望めば、枯れたるは白く、榮えたるは黑く、神代にありけむといふ、青山を枯山に成せることを、目のあたりに見るも、れそろし。

車は、この山々の間を、とざまかうざまに走り、常に、フレェサア川に添ひてゆく。この川は、落機山の麓なる湖より流れいでて、太平洋に注ぐ川なり。水流、きはめて、急に、岩石に碎けて激せるさま、もの凄じきまで、れもしろし。

ノースベンといふ處に、とゞまし、停車して夕食す。小雨、うち降りたるに、入日の影、さしそひたる景色、いと、よし。

たゝなはる、大山小山、霧こめて、

ふれさ川原に、虹たちわたる。

ヴアンクウバーを發車してより、山の谷々、または、川邊にそひて、穴居せる人の、處々に見ゆるを、「何ぞ」と、問へば、「これぞ、此處の土人にて、いはゆる、亞米利加印度人といふ者なる」と、いふ。穴居ならざる家宅は、大木を組みなして作れるものにて、さながら、我が國の、古寺などの中に殘れる、校倉の如し。停車場ごとに出で居るを見るに、吾人の相に似通ひたるは、汗いづる心地す。この人種の數、今は、五萬ばかりあり。英政府より保護せられ居りとぞ。されど、年々に、減じゆくありさまなれば、百年の後は、その種、殘るや否や。優勝劣敗の世の中とはいへ、この土地は、もと、この人種の物なりしに、かくまでに成り果てたる、誰か痛嘆に堪へざらむ。徒に、國内にて、鷸蚌の如き爭を事として、外に對する一致心なき國は、往々にして、漁夫の利となることあり。戒めざるべけむや。（池邊義象文稿抄錄）

中等國語讀本卷三終

明治三十四年十一月十五日　印刷
明治三十四年十一月十九日　發行
明治三十五年二月四日訂正再版印刷
明治三十五年二月七日訂正再版發行

定價表

一、二、三、四	每冊貳拾貳錢
五、六、七、八、九、十	每冊貳拾四錢

明治三十五年二月十四日
中學校用文部省檢定濟

不許複製

著者　東京市本郷區駒込淺嘉町七十八番地　落合直文

發行者　東京市神田區錦町一丁目十番地　三樹一平

印刷者　東京市神田區三河町二丁目十六番地　鈴木友三郎

印刷所　東京市京橋區西紺屋町二十六七番地　株式會社　秀英舍

發行所　東京市神田區錦町一丁目
（特電話本局二四三八番）　明治書院
大阪市東區備後町四丁目
（特電話東二四九番）　吉岡平助

關西專賣

賀川藏書